

久光は西郷を呼び戻したくない。

しかし、藩の大勢は西郷の復帰を待望していた。
西郷の人望、指導力は久光(藩主)個人の好き嫌いを超えたところで、
是非もなく必要とされたのであろう。

久光には「懐が狭いと思われたくない」というプライドがあった。
教養人独特の発想である。

「いいんじゃないの」彼は、本心とは裏腹に
そんな様子を見せながら西郷を赦したのだろう。

自分には、そのところが貴族の弱さ、
保守的教養人の限界のように思える。

「久光個人のみ的人生」という視点に絞って考えてみると…

会社でいえば、久光が実質オーナー会長なのである、
自分に対して礼を失する者は、いつ刃を自分に向けてくるか分からない。

それが、周りからどんなに信望があり、実力者であっても
赦すべきではなかったのではないか。
そのうえで自分の思うようにやれば、
結果がどうであれ、それはそれで納得できたのではないか。

ここで赦したがために、
後に臣下である藩士達に強面に迫られるような格好で、
再度、西郷を赦さざるを得ない場面を迎え、
その又先の維新後、西郷、大久保に騙された、
騙されたと毎日言い続けるような、
精神的に暗く悲惨な日々を送るようになってしまうのである。

屈折した久光の感情を知ってか知らずか、

赦された西郷は久光に対して、
赦免にかかる感謝の念もへりくだるようすも見せていない。

この頃には、あくまで斉彬の遺志を継いだ
“日本の現状打開”が視界にある西郷と
薩摩藩と自身の立場に拘る久光とは、
思想面でも相容れなくなっていたのであった。

島津久光も、斉彬の遺志を継ぎ、
形としては公武合体を考えていた。

しかし、**斉彬がそうしたうえで「日本対列強」を考えていたのに比べると、
やはり久光の視野は狭いと言わざるを得ない。**

時局は、急流に呑み込まれるような勢いで過激さを増していった。

幕府の権威は地に落ち、
京では安政の大獄のリアクションである天誅（佐幕側に対するテロ）の
血なまぐさい風が吹き始めようとしていた。

公武合体の政略のため、
皇女和宮（孝明帝の妹）が将軍家茂に降嫁したのもちょうどその頃であった。

公武合体、尊王攘夷、倒幕、の混乱の中、西郷は島から帰ってくる。

帰国した西郷は—— 又、久光の命に背いてしまう。